CHAPTER

5

レガシー
神奈川・横浜の未来へ

大成功のうちに幕を下ろしたラグビーワールドカップ2019™。この感動と興奮を一過性のものにしないために、本大会を総括するとともに、本大会が神奈川・横浜に残したものを確認し、そして未来へ継承していく。

発祥の地から決勝の地、そして未来へ

はじめに

ラグビーの試合が日本で初めて行われたのが、ここ横浜と言われている。この日本ラグビー発祥の地で、世界ラグビーの最高峰ラグビーワールドカップ2019の決勝が行われ、成功のうちに幕を下ろした。

この伝統を、そして大会の成果を、神奈川・横浜の未来にレガシーとして遺していかなくてはならない。

日本ラグビー発祥の地 神奈川・横浜

開港以来、横浜には多くの西洋文化が流入し、日本ラグビー発祥の地もここ横浜と言われている。

1866（慶応元）年1月、横浜外国人居留地で横浜に駐屯していたイギリス陸軍の士官や横浜在住のイギリス人が中心となって、横浜フットボールクラブ（Yokohama FootBall Club、現 横浜カントリー＆アスレティック・クラブ（以下、YC&AC）が設立された。

1874（明治７）年４月にロンドンで発行された雑誌「ザ・グラフィック」に、「日本のフットボール」として前年（1873年）、横浜で行われた試合の様子が挿絵付きで掲載されていた。

記事には「イングランド対スコットランド・アイルランド連合軍の試合は４時にキックオフされた。試合は引き分けだったが、優劣よりも気合いの入った試合だった（後略）」とあり、挿絵に外国人同士によるラグビーマッチの様子が描かれている。背景には富士山らしき山と試合観戦をする多くの日本人（東洋人）の姿がある。

1874年の「ザ・グラフィック」に掲載された描画
アジア初の国際試合の様子が描かれている。
1A foot ball match at Yokohama,Japan,TheGraphic,
1874,4,18より　　横浜開港資料館蔵

この記事と絵によって、1871（明治４）年にロンドンでイングランドラグビー協会（RFU）が設立されたわずか２年後に、横浜で国際ラグビー試合が開催されていたことが証明された。これは記録に残るアジア初の国際ラグビー試合である。

2015年には英国トゥイッケナム・スタジアムに併設されている権威ある「ラグビー博物館」からも、「横浜フットボールクラブ」はアジア最古のラグビーフットボールクラブであり、世界でも最古のラグビーフットボールクラブの一つとして認定された。

これを受け、神奈川県ラグビーフットボール協会が中心となり、ラグビーワールドカップ2019が開催される直前の2019年９月５日に、『日本のラグビー発祥地 横浜』の碑が建立された。

現在では、トップリーグから大学ラグビー、高校ラグビー、女子ラグビーと幅広く、県内から強豪チームを輩出している。

中華街の関帝廟通りに面した山下町公園において除幕式が行われた（2019年9月5日）

ラグビーワールドカップ 2019の成功

日本、そしてアジア最古のラグビーフットボールクラブが設立されてから153年、世界の頂点を決めるラグビーワールドカップが日本、そしてアジアで初めて開催された。

今大会は、大会全体の観客動員数は170万4,443人に上り、チケット販売率は99.3％と過去最高の販売率を記録、テレビ視聴率は横浜国際総合競技場で行

われた日本対スコットランド（日本テレビ）の瞬間最高視聴率が53.7%を記録、ファンゾーンも全会場の総入場者数が約113万7,000人と大会新記録となるなど、数々の記録を打ち立てた。

試合においても、日本代表の初の決勝トーナメント進出をはじめ、数々の名勝負やドラマが世界中を大いに熱狂させた。

また、試合だけではなく、ラグビーの持つ精神も多くの人々に感動を与えた。決勝トーナメント進出をかけた、10月13日の日本対スコットランド戦では、敗れたスコットランド代表選手が、花道を作り、日本代表選手を拍手で祝福し、続いて日本も相手の健闘をたたえた。

この、試合が終われば敵、味方がなくなる「ノーサイド」の精神をはじめ、競技の持つ精神性はラグビーに関心のなかった人々にも大いに感動を与えた。

敗れたスコットランドが花道を作り、日本代表を称える

一方で、試合以外でも、日本のおもてなしや交流も世界中からの注目を浴びた。

海外チームを迎える各開催都市や公認チームキャンプ地に指定された自治体では、歓迎セレモニーや交流が行われた。

各地の試合会場においても、海外から来た選手やファンを歓迎する雰囲気に包まれ、日本のファンが外国チームのレプリカジャージを着て応援し、対戦国・地域のアンセムを一緒に歌った。

選手たちが、おもてなしへの感謝の意を表し、試合後に「お辞儀」を行う姿は世界中のメディアから注目を集めた。

国際統括団体ワールドラグビー会長のビル・ボーモント氏から「最も偉大なワールドカップとして記憶に残る。日本は開催国として最高だった」と評された。今大会は、観客動員の記録や数々の試合だけではなく、競技場内外で生まれたドラマが世界中に発信され、多くの感動と価値を遺し、成功のうちに幕を下ろした。

選手たちが感謝の意を表し、観戦席に向かって「お辞儀」

決勝の地、そして未来へ

神奈川・横浜は、決勝会場であり、横浜市長が開催都市19自治体の首長で構成される「ラグビーワールドカップ2019開催自治体協議会」の会長を務めるなど、大会成功の重責を果たした。

試合会場である横浜国際総合競技場においては、決勝には同競技場で過去最多の70,103人が観戦に訪れ、神奈川・横浜ファンゾーンの入場者数は、13日で延べ15万3,700人にのぼった。 神奈川・横浜の約1,500人のボランティアのおもてなしも高く評価され、横浜の街は大いに賑わい、神奈川・横浜の魅力が世界に大きく発信された。

神奈川県・横浜市では、大会開催が決定した2015年から、行政だけでなく、関係団体や民間事業者と連携して、大会の安全・円滑な運営とともに、神奈川・横浜から大会を大きく盛り上げるために、様々な取組を行い、その結果がこの大会の成功につながった。

大会組織委員会からは、「神奈川県・横浜市の大会運営は、世界トップレベル」と評価された。

この大会のノウハウと、オール神奈川・横浜の結束を後世に遺していかなくてはならない。

また、これまで県・市そして県・市ラグビーフットボール協会は、スクラムを組みラグビーの普及に努めてきた。

このラグビーの盛り上がりを一過性のものとせず、ラグビー競技の普及、そしてスポーツの振興につなげていかなくてはならない。

オール神奈川・横浜の開催能力とおもてなしを後世につなげる

はじめに

神奈川県・横浜市は、民間事業者をはじめ関係機関と連携し、オール神奈川・横浜で開催準備・機運醸成に取り組み、大会成功に貢献した。

ここでは、神奈川・横浜がワンチームとして遺した大会運営や機運醸成などの実績を紹介し、これをレガシーとして後世につなげていく。

『World Leading』と評された開催都市運営

本大会の大会運営は、2002FIFAワールドカップにおける運営を土台に、開催都市決定以降、検討を重ねて改良を積み重ねてきた。

テロ対策などをはじめ昨今の社会情勢を踏まえた安全対策や、スマートフォンやウェアラブルカメラなどのICT機器の活用、そのほか様々な改良を加え、情報受伝達などの訓練も行い、大会に臨んだ。

試合開催日は、臨機応変な対応、内外とのスムーズな情報受伝達を行えた結果、雑踏事故や交通事故、テロ事案もなく、無事に大会運営を終えることができた。この運営体制には、ノウハウの継承を目的に、市オリンピック・パラリンピック推進課、市スポーツ振興課からも多数の職員が応援として従事しており、この成功を東京2020大会の開催につなげていく。

開催都市運営本部には翌年の東京2020大会の担当職員も数多く従事

また、2019年10月、大型で非常に強い台風19号が日本列島を直撃、12日のイングランド対フランスの試合は中止、翌日の日本代表の初の決勝トーナメント進出を賭けた、日本中が注目する日本対スコットランドの試合も開催が危ぶまれていた。

競技場や開催都市の職員は試合前日から競技場及び大会運営本部に詰め、当日早朝から競技場内の施設・設備の復旧や清掃、周辺状況や交通機関等の状況などの調査を行い、試合開催に漕ぎつけた。

大会組織委員会からは、こういった開催都市としての大会運営は“World Leading”であると評価された。

こうしたノウハウは、県・市として蓄積し、今後の大規模スポーツイベントに継承していく。

ワンチームの神奈川・横浜

大会に向けた開催準備・機運醸成は、多くの県内・市内経済団体や交通事業者、医療機関の協力の下、オール神奈川・横浜で行われた。

官民連携組織である、「横浜開催推進委員会」や「ラグビー・オリパラ神奈川応援団」を中心に、盛り上げに向けた協力や、交通輸送・医療救護対策の検討などを進めてきた。両組織は東京2020大会に向けた組織でもあることから、今大会の実績を活かし、引き続き活動が進められていく。

また、神奈川県議会、横浜市会では、「ラグビーワールドカップ2019を成功させる神奈川県議会議員の会」及び「ラグビーワールドカップ2019を成功させる横浜市会議員の会」を設立し、議員、行政一丸となり、大会の成功に取り組んできた。

さらに、県内の民間企業が集まり、ラグビー競技の支援とこれを通じた経済の活性化を目的に、「神奈川ノーサイドプレミアクラブ」が設立されたほか、大会公式スポンサーをはじめ、様々な民間企業に、機運醸成などへ協力をいただいた。

開催都市決定以降、大会の主催者である大会組織委員会とは、役割分担の下、スクラムを組み、大会準備を進めてきた。

2018年4月にラグビーワールドカップ2019組織委員会神奈川・横浜地域支部が設立されてからは、日

「ラグビーワールドカップ2019・東京2020オリンピック・パラリンピック横浜開催推進委員会　ラグビー・オリパラ神奈川応援団　合同総会」（2019年7月11日）

常的に情報共有、業務連携を行い準備を進め、試合開催日には、相互に連絡員を派遣し、大会運営における連携も非常にスムーズに進められた。

このように大会の成功には、様々な関係機関の立場を越えた協力があり、まさに「ワンチーム」での成果であった。

ボランティアのおもてなし

神奈川・横浜会場では、約1,500人のボランティアが大会の顔として、競技場周辺及びファンゾーンなどにおける案内誘導やおもてなしで活躍した。

ボランティア参加者の約８割が日常会話ができる英語力があったことから、海外から訪れる多くの観戦者への案内誘導も非常にスムーズに行うことができた。

また、神奈川・横浜会場のボランティアのホスピタリティは高く評価され、試合終了後に会場周辺やファンゾーンで行われたお見送りのハイタッチは、国内外からの観戦客に喜ばれた。

本大会を通じて、横浜市スポーツボランティアセンターの登録者数の増加だけではなく、何よりもボランティア参加者にやりがいを感じていただけたことが神奈川・横浜のボランティア文化の醸成につながった。

新横浜駅の案内デスクにて、観戦客をご案内

試合終了後にお見送りのハイタッチ

世界唯一の競技場へ

神奈川県・横浜市はこれまでにも様々な国際大会を運営してきた実績を持つ。

本大会においてもその能力を発揮し、運営だけでなく、選手が最高の環境下で最高のプレーができるように、横浜国際総合競技場の整備を行った。

ボールが見やすく、４Kや８Kのテレビ中継にも配慮した照明のLED化、ラグビーなどの激しいスポーツの短期間での連戦にも耐えられるハイブリッド芝への張り替えなどを実施し、競技場としてのポテンシャルを向上させた。

また、トイレやスタンド観客席の更新により、観客へのホスピタリティも向上させた。

2020年には同競技場で、東京2020大会の男子サッカー競技の決勝が行われることが決定しており、2002FIFA ワールドカップ決勝とあわせ、世界３大スポーツイベントの決勝が行われる世界唯一の競技場となる。この大会開催実績とあわせ、同競技場のプレゼンスを大きく飛躍させるため、次の大会への準備が既に進められている。

開催期間中、試合会場は競技場内外に大会の装飾が施された

ファンゾーン、新たな観戦スタイル

神奈川・横浜のファンゾーンは、12開催都市最大面積を誇り、13日間の開催期間中に延べ15万3,700人が来場（うち４日間は来場者多数のため入場規制が行われた）、ケータリングの総売上が１億3,391万円を記録するなど、大盛況のうちに幕を閉じた。

ファンゾーンは入場無料で、大型スクリーンでのパブリックビューイングだけではなく、ステージイベントや飲食、ラグビー体験のアクティビティなどを楽しめる空間として、海外ラグビーファンに定着している。

また、同様に欧米では既に定着している、試合前後に特別な料理やイベントを用意するなどしておもてなしする観戦スタイル「スポーツホスピタリティ」も今大会、本格的に導入され、高額なパッケージ商品が短期間で完売するなど大変好評であった。

ファンゾーンやスポーツホスピタリティという、これまで日本には馴染みの薄かった新たな観戦スタイルの成功は、スポーツが持つ新たな可能性として翌年の東京2020大会へと継承されていくだろう。

大盛況で幕を閉じた神奈川・横浜ファンゾーン

公式ホスピタリティラウンジ（外観）

神奈川・横浜の魅力を世界へ

開催期間中、横浜都心臨海部や競技場周辺には街灯バナーや横断幕などのシティドレッシングを施し、街はラグビー一色となった。さらに新横浜エリアにおいては、花と緑で賑わいを演出するなど、街には祝祭感が溢れた。

また、横浜都心臨海部では「NIGHT SYNC YOKOHAMA（創造的イルミネーション）」などの開催や、大会にあわせた三溪園や横浜能楽堂での和文化を体験できるイベント、臨時シャトルバスの運行など、神奈川・横浜の魅力を感じていただける取組を行った。

海外からの観光客に快適な滞在環境を提供するため、新横浜駅周辺や横浜都心臨海部の案内サインを更新し、公衆無線LAN（Wi-Fi）の整備などを行った。

また大会期間中は、市内主要ホテルには多くの外国人が宿泊した。対前年比の稼働率は台風の影響を受けたものの、10月については宿泊者のなかで外国人が占める割合が約20%と過去最高水準に達した。宿泊者の国籍は英国、ニュージーランド、アイルランド、オーストラリアなどが多く、ラグビー観戦のために訪れたと考えられる。

横浜駅前にあるグローバルブランドである横浜ベイシェラトン ホテル＆タワーズによると、宿泊予約や問い合わせは大会1年前から入り始め、大会期間中も試合結果にあわせて予約や問い合わせが入り続けた。前年に比べても宿泊客数が大きく伸びたという。

また、神奈川・横浜での試合開催日はホテルに戻ってからも各料飲施設でビールを注文するお客様が多く、これまでの国際的なスポーツ大会では見られなかったことだった。

また、大会にあわせ、神奈川・横浜では、認知度向上に向けた戦略的な観光プロモーションを行った。海外テレビネットワークの活用、航空機内や空港ターミナルでのプロモーション、ツアーを企画する旅行会社、法人向け、個人旅行者向けとターゲットに応じた誘客活動を行った。

開催期間中は神奈川・横浜に多くのメディアが訪れ、横浜能楽堂などの観光地を訪れるメディアツアーも実施した。

ラグビー強豪国を中心に「決勝の地 横浜」として国内外に広くメディアに取り上げられたことと、大会期間中に外国人観戦客を対象に行ったアンケート調査では、再来訪意向や他人への推奨意向も高いことから「観光地としての横浜」の魅力をさらに発信し続けることで、大会後のさらなる誘客につなげていく。

ランドマークプラザの中にも懸垂幕を設置。三菱地所㈱によるラグビーボール装飾も施され、官民一体で大会を盛り上げた

競技場周辺にも装飾を施した

神奈川・横浜のラグビーの未来のために

ラグビーの普及のために

日本初開催となった本大会は、日本にラグビーを広げる大きな機会であるとともに、神奈川・横浜においてラグビーという競技を大きく飛躍させる大きなチャンスであった。

神奈川・横浜はこの機会を生かして、日本ラグビー発祥の地として、またラグビーワールドカップ2019決勝の地として、県・市ラグビーフットボール協会（以下、県・市協会）、神奈川県、横浜市がそれぞれの強みを生かし、連携して競技の普及に取り組んできた。

普及の取組としては、県・市協会と行政が連携し、廣瀬俊朗氏などラグビー元日本代表選手等が小学校の授業でタグラグビーなどを教える小学校訪問事業、ラグビー元日本代表選手で横浜にゆかりのある吉田義人氏による親子ラグビー教室などを行い、競技普及に取り組んだ。

東海大学「丹沢祭」ではラグビー部の学生がラグビーを教える

この競技普及の取組の推進にあたっては、県内唯一のジャパンラグビートップリーグに所属する三菱重工相模原ダイナボアーズ、横浜市戸塚区で活動する女子ラグビーチームYOKOHAMA TKM、東海大学、慶應義塾大学、関東学院大学などの県内の大学、東京ガス㈱をはじめ民間企業など様々な団体にご協力いただいた。

ラグビー教室だけではなく、三菱地所㈱からはラグビーボールを横浜市内の市立小学校全校に各３個合計1,100個、㈱ＮＴＴドコモと4th and Goal LLCと共同で横浜市内の市立小学校18校へタグラグビー用具一式、AIG損害保険㈱からタグラグビーキットをそれぞれ寄贈いただくなど、普及に向けた環境も整った。

また、さらなる普及に向けて、県・市協会と行政が連携し、小学校教諭向けタグラグビー指導者講習会を実施するなど、ラグビーを指導できる人材の育成も進めた。

さらに、ミニラグビーの普及に向けて、県協会主催の「神奈川県ミニラグビーファイナルカップ」の開催、NPO法人ヒーローズ主催のミニラグビーの全国大会「ヒーローズカップ」の開催などについても、行政も支援し取り組んできた。

ラグビーの精神、競技を通じた交流

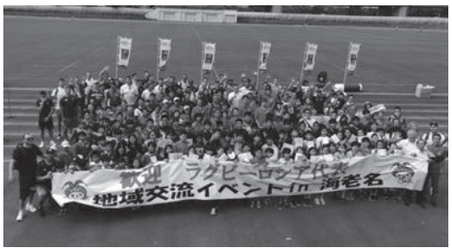
本大会においては、ラグビー競技そのものだけではなく、「ノーサイド」や「One for All , All for One」、５つのコアバリュー（品位、尊重、規律、情熱、結束）などの言葉に代表される、競技の持つ精神性にも大きく注目が集まった。

県協会は、「やさしさにトライ」をスローガンに、いじめの防止、震災復興支援など様々な社会貢献活動や、トップリーグの試合会場や県内ビーチでの美化活動などにも取り組んでいる。

また、本大会開催を契機として、ラグビーを通じた国際交流も行った。

公認チームキャンプ地である海老名市ではロシア代表、小田原市ではオーストラリア代表と市民との交流が行われ、横浜市でもアイルランド代表と、練習場所としてグラウンドを提供した関東学院大学ラグビー部の学生などとの交流が行われた。

また、競技を通じた国際交流やラグビーの普及、将来世代の育成を目的として、日本を含む７カ国・地域の子どもたちが参加した「こどもラグビーワールドフェスティバル2019 supported by 三菱地所グループ」の開催をはじめ様々な国際交流イベントを、様々な団体にご協力いただき、実現してきた。



海老名市でのロシア代表との地域交流イベント

ラグビーの明日を担う若者たち

ラグビーワールドカップ2019の日本開催は、はじめてラグビーを見た子どもたちから、既にラグビーに親しんできた児童や生徒、将来のラグビー日本代表を目指す学生にまで、多くの感動と夢を与えた。

この夢は、大きなレガシーとして神奈川・横浜のラグビーの未来を切り開いていく。

神奈川・横浜のラグビーの明日を担う子どもたち、若者たち、そして指導者たちに話を聞いた。

〈 小学校 ～はじめてのタグラグビー～ 〉

神奈川県・横浜市ではラグビーワールドカップ2019の日本開催を契機に、ラグビー競技のさらなる振興と、大会前後の機運醸成に向けた取組として、小学校訪問事業を2016年から始めている。

2019年11月中旬、ラグビー元日本代表選手で2015年大会でチームキャプテンを務めた経験を持つ廣瀬俊朗氏が横浜市立中和田小学校を訪問した。体育館で行われた講演ではスライドを使用してラグビーワールドカップ2019での日本代表の戦績を振り返り、身体の大きさやできることが違っていても、活躍できるポジションがあるラグビーの魅力を伝えた。

続いてのタグラグビーの実技指導は、神奈川県ラグビーフットボール協会のメンバーに廣瀬氏も加わる形で行われた。

ルールとボールやタグの扱い方の説明後に、実演しながら指導をしていく。初めてラグビーを体験する児童たちも、テレビなどでラグビーワールドカップ2019を観戦したこともあって、積極的にタグを取り合い、ルールを身体で覚えていった。

最後は、6～8名でチームをつくり、大人のチームと対戦。腰につけたタグを相手に取られると、チームメイトにボールを回し、トライが決まると、全員でハイタッチして喜び合った。チーム全員の力で取った1点の重みを感じ取ったようだ。

ラグビー元日本代表キャプテン
廣瀬俊朗さん

数年前にも小学校を訪問しましたが、当時と比較すると、ラグビーについての関心度が上がったな、と実感しました。ラグビーは多様なメンバーが集まってチームを構成しています。子どもたちにはラグビーを通して周りの友だちの個性を認め、相手を思いやる気持ちを育んでもらいたいと考えています。2020年の東京2020オリンピック・パラリピックでは7人制ラグビーや車いすラグビーも競技種目に入っていますから応援して欲しいと思います。

中和田小学校3年4組
片野愛大さん

ラグビーは観たことがなかったけれど、今日、タグラグビーを体験し、またやってみたいなと思いました。日本チームには4年後は優勝して欲しいです。

中和田小学校3年4組
猶原美羽さん

タグラグビーは思っていたより走らないといけなかったけれど、みんなで協力してトライを決めることができて、楽しかったです。

横浜市立中和田小学校で行われた訪問授業

〈 ラグビースクール ～ラグビーの楽しさを知る～ 〉

小学校や中学校では、体育の授業でタグラグビーやラグビーを取り入れている学校が限られている一方で、ラグビースクールでは幼稚園児から小・中学生までを対象に、ラグビーを教えている。県・市で活動するラグビースクールのひとつが、1970年に誕生した全国最大規模の横浜ラグビースクールだ。

生徒の在籍数は約600人で、毎週土・日の朝には練習拠点である保土ケ谷公園ラグビー場に大勢の子どもたちが保護者と一緒にやって来る。

横浜ラグビースクールではラグビーを通じてスポーツの楽しさを教えるだけでなく、相手を思いやる気持ちやコミュニケーション力を持った人間を育てることを目的に活動をしている。

週１、２回の練習では、ラグビーに必要な体の使い方やボールを使った連係プレーなどを学年ごとに分かれて学ぶ。指導は、経験者だけでなく、一緒に携わりたい保護者がコーチ資格を取得して行い、年少のクラスほどコーチの数を増やし、飽きずに楽しく学ぶ環境作りと、安全に細心の注意を払う。

ラグビーの様々な動きから体を動かす楽しさを体感し、小学生や中学生になると競技としてのラグビーの面白さを知って、ますますラグビーが好きになっていく子どもたち。プレーすることだけでなく試合観戦にも興味を持つ彼らが、明日のラグビーを担っていく。

横浜ラグビースクールの幼稚園児

横浜ラグビースクール校長
井上史彦さん

日本代表のジャージを着てくる子どもが増えました。2015年のイングランド大会直後には見られなかった現象で、日本代表に憧れる子どもが増えている何よりの証拠ではないでしょうか。ラグビーを身近に感じてもらえるのは、本当にうれしいことです。小さな子はかけっこから始め、やがて周りの小学生を見て、ボールを持って走ってみたくなる。こうしてラグビーが好きな園児や生徒が増えることで、神奈川や横浜にラグビーが広がっていくことを期待しています。

小学６年生
渡邉彩花さん

イングランド大会で日本代表の活躍を見て、やりたいと思って小学３年生から始めました。練習を重ねて、レベルの高い仲間に追いついたときに喜びを感じます。ずっとラグビーを続けてもっとうまく強くなりたいので、高校ではラグビー部のある学校に進学します。

小学６年生
坪井 悠さん

叔父に憧れて小学１年生から始めました。サインプレーや早いパス回しでトライをとるのが最高です。ワールドカップは３試合を観ましたが、スコットランド戦でボールをつなぎきった稲垣選手のトライに感動しました。

〈 高校ラグビー部 ～ラグビーから学ぶ生きる力～ 〉

神奈川・横浜には高校ラグビーの強豪校として全国的に知られる高校がいくつもある。そのなかの一校が、2020年の全国高校ラグビー大会で優勝を飾った桐蔭学園高校のラグビー部だ。部員は約100名、放課後に設備の整ったグラウンドで練習をする。

今回のラグビーワールドカップ2019にはOBである松島幸太朗選手が出場した。偉大な先輩を目標に、先輩に追いつこうと、部員たちの練習には熱が入る。

桐蔭学園高校ではラグビーワールドカップ2019開催を機に、ラグビー普及のためにグラウンドを開放して近隣の小学生とその保護者を招いて交流会を開いた。「今後のラグビー普及には、グラウンドなどのハード面の整備以上に、安全な指導ができるコーチの育成といったソフト面の充実も必要だと考えています。そのためにできることはしていきたい」と桐蔭学園ラグビー部の藤原監督。

ラグビーワールドカップ2019の成功でラグビー人気はあがっている。しかし普及には地道な活動が必要だと考える藤原監督は、グラウンド開放などを今後も続け、ラグビーの楽しさや面白さを伝えていきたいと言う。

桐蔭学園高校ラグビー部

桐蔭学園高校
ラグビー部監督
藤原秀之さん

高等学校のクラブ活動である以上、教育の一環として勝つことだけが目標ではなく、ラグビーを通して生徒自身が何かを感じ取ることが大切だと考えています。ラグビーのスポーツとしての技術やスキルを学ぶだけでなく、コミュニケーション能力や自分の力で生きて行くことができる、ライフスキルを身につけることも大きな目標です。

そして、高校ラグビー神奈川県大会で毎年のように優勝を競い、全国大会では優勝2回、準優勝1回の成績を残しているのが慶應義塾高校蹴球部だ。

慶應義塾は1901年、横浜の外国人クラブ（YC&AC）と試合を行い、5対35で敗れたという日本人として初のラグビー試合の記録が遺されている。

慶應義塾高校の蹴球部には、大学にならったルーツ校らしい塾蹴球部憲章がある。「日本ラグビーの始祖たる矜持と責任において、独立自尊たる紳士を育む」。

塾蹴球部憲章の精神は日々の活動にも現れている。同じく古くからラグビーに取り組んでいる早稲田大学高等学院や同志社高校などと定期戦を設け、さらには海外から学校を招待して試合を組むことも少なくない。ホスト校として試合後にはかならずアフターマッチファンクション（交流会）を設け、選手間、学校間の交流も大切にしている。

日本ラグビーのルーツ校である慶應義塾には、世界ラグビー関係者も敬意を払う。2015年のラグビーワールドカップ イングランド大会の開催前、次の大会が行われる日本の横浜市に所在する慶應義塾のグラウンド（横浜市港北区）で、優勝トロフィー「ウェブ・エリス・カップ」が公開された。

今回のラグビーワールドカップ2019では、ボールパーソンとして10人の生徒が神奈川・横浜会場での試合に参加した。

地元開催ならではの感動は大きなレガシーを彼らに遺していく。

慶應義塾高校蹴球部

慶應義塾高校3年生
木村亮介さん

決勝戦を含む3試合でボールパーソンという重責を担いましたが、世界最高峰の試合を目の当たりにして圧倒されました。日本対スコットランド戦では観客の熱狂ぶりに驚かされ、ラグビー人気の盛り上がりを実感しました。

〈 大学ラグビー部 ～地域とともに～ 〉

ラグビーワールドカップ2019の成功はラグビーを知らなかった人たちにまでラグビー広めたことだけでなく、若きラガーマンたちの意欲にも火をつけた。

大学のラグビーフットボール部で活躍する学生たちにトップリーグに入る大きな目標ができた。

マネージャーを含めて部員は約180人と、国内の大学では最大規模を誇る東海大学ラグビーフットボール部の学生たちも目標は関東大学リーグ戦での優勝であり、トップリーグ入りだ。毎日の練習を通してそれぞれが自らの役割を自覚し、チームとして一体となる力がラグビーフットボール部の強さを支えている。

しかし、東海大学ラグビーフットボール部の目標はそれだけではない。毎年7月に湘南校舎内のラグビー場で開かれるラグビーフットボール部のイベント「丹沢祭」の中で、数年前から始めた近隣の小学生へのラグビーの指導は、ラグビーフットボール部の強化のみならず、地域の活性化にも役立っている。丹沢祭は、神奈川県や企業との連携も加わり、今では近隣のラグビースクールの子どもたち、未経験の小学生、幼稚園児ら2,000人が参加するラグビーの一大イベントになった。

さらに、秦野市の小学校や幼稚園に部員を定期的に派遣して、ラグビーに接する機会を設けている。最近では東海大学の活動でラグビーと出会った小学生たちが、ラグビーフットボール部入部を目指して入学してくる例も増えている。

多くのラグビー日本代表選手を輩出し、大学ラグビー界の強豪であり続ける東海大学ラグビーフットボール部は、ラグビー普及にもその力を発揮している。

東海大学ラグビーフットボール部

東海大学
ラグビーフットボール部監督
木村季由さん

この10年間は、学生たちを関東大学リーグ1部で優勝するまでに育てると同時に、地域にラグビーの種を蒔いて地道に育ててきた年月でもあります。地域との関わりのなかでチームも成長してきました。今回のラグビーワールドカップに本学の3人のOBが日本代表に選ばれたことは大きな喜びです。日本代表は学生たちの憧れの存在です。彼らがベストパフォーマンスを発揮し、チームに貢献した姿に心から敬意を表したいと思います。

東海大学4年生
主将
眞野泰地さん

兄の影響でラグビーを始めたのは小学1年生の時で、東海大仰星中学、高校とプレーを続けてきました。ラグビーの魅力は、頭を使いながら体を動かすことにあります。ラグビーワールドカップで日本代表が活躍した姿を見て、大学ラグビーにも弾みがつきます。

東海大学4年生
副主将
中野 幹さん

高校では野球をやっていたのですが、同級生の眞野くんに誘われて、ラグビーに転向しました。今回のラグビーワールドカップを見て、さらなる上のラグビーを目指すうえでは、何が必要かを見つけられたと思っています。

関東学院大学ラグビー部にとっても今回のラグビーワールドカップ2019は特別な大会となった。

横浜市に協力して、天然芝のラグビー専用グラウンドをアイルランド代表とスコットランド代表の公認チームキャンプ地トレーニング施設として提供したのだ。チームが練習中は大学ラグビー部はグラウンドが使えない不便さはあったが、世界レベルのグラウンドと認められたことは部員たちにとって誇りになった。

1991年から天然芝のグラウンドを開放して、小学生を対象にラグビーを教えるなど、早くからラグビーの普及に取り組んできた。

現在もラグビー部のスタッフや部員が指導を行う毎週土曜の活動には、金沢区内を始め横浜市内から約70人の小学生が集まる。7月と12月には神奈川県チームを中心としたタグラグビーの大会「関東学院カップ」を開催している。

また2002年に横浜市がタグラグビーを体育授業の選択科目に導入した際には、部員たちがボランティアとして教師や児童への指導を行った。

女子ラグビーの普及にも熱心で、2015年には関東学院六浦中学校・高等学校に神奈川県内初の女子ラグビー部が創設された。県・市にはまだ女子ラグビー部のある高校が少なく、ラグビーを続けたい女子生徒の県外の高校への流出を食い止めている。

関東学院大学ラグビー部は、優秀な選手を関東全域に輩出する一方、これからも神奈川県・横浜市の小中学校へのラグビー普及を牽引する役割を担っていく。

関東学院大学ラグビー部監督
板井良太さん

この大学のラグビー部はOBや横浜市の皆さんに応援していただいて強くなってきました。今回のラグビーワールドカップでは、OBの稲垣啓太が出場しましたが、学生たちは先輩の勇姿をみて、次は自分も出たいという気持ちを強くしたと思います。地元開催で夢が広がりました。

関東学院大学４年生
川崎龍清さん

高校でラグビーを始めました。板井監督に勧められて入部しましたが、今の環境が自分に合っていて楽しく練習しています。卒業後はトップリーグでプレーします。

関東学院大学４年生
鈴木伊織さん

キャプテンとして15人が一体となってボールをつないでいけるよう、常にチームのまとまりを考えています。ラグビーワールドカップで公認キャンプ地に選ばれるほど質のいいグラウンドで練習できることを誇りに思っています。

関東学院大学ラグビー部

関東学院大学の天然芝のグラウンド

ラグビーワールドカップ2019
神奈川・横浜開催を終えて

■ラグビーワールドカップ2019開催都市特別サポーター（神奈川県・横浜市）

林 敏之氏

ラグビーワールドカップは本当に素晴らしい大会でした。競技場、ファンゾーン、パブリックビューイングに大勢の人が来て、ラグビーを楽しんでくれました。ラグビー関係者として嬉しかったし、サポーターとして大会の盛り上げに関われたことは光栄でした。

２年前までラグビーワールドカップの認知度は低くて心配しましたが、終わってみればアジアを代表して日本で開催された本大会は大成功でした。運営に携わった方々の努力に敬意を表したいと思います。

ワールドカップは大成功に終わりましたが、今後の日本ラグビーの課題は、トップリーグの再構築と、教育を柱とした将来世代へのラグビー普及育成だと思っています。

ラグビーの面白さや楽しさ、そして文化を発信して、今回ラグビーファンになった人たちの心をしっかり掴まなければいけません。

元々教育のために生まれたラグビー、私はヒーローズカップを主催してラグビー普及育成に取り組んできましたが、本大会の日本開催によって、子どもたちのラグビー熱は一気に上がりました。昨年と今年、ヒーローズカップの決勝大会を横浜で行うことができましたが、これからも県・市と協力して多くの子どもたちにラグビーの素晴らしさを伝えていけたらと思います。

〈プロフィール〉同志社大学在学中から日本代表に選出され活躍。NPO法人ヒーローズを設立し理事長に就任。ヒーローズカップを主宰

吉田義人氏

今大会終了後の会見で、ワールドラグビーのビル・ボーモント会長は「今回大会は最も偉大なワールドカップとして記憶に残る。日本は開催国として最高だった」と述べましたが、本当に素晴らしい大会でした。

特に記憶に残るのは10月13日の日本対スコットランド戦への対応です。台風通過後、試合開催が危ぶまれる中で会場復旧に向けるスタッフや関係者の熱意には頭が下がりました。競技場の遊水地としての重要な役割、緊急事態を想定して準備をしていた運営体制が世界中に伝えられ、高く評価されました。日本のラグビー関係者としても誇りに思いました。

神奈川県・横浜市と協力して、ラグビ―ボールに触れたことのない親子を対象に、親子ラグビ―教室を開催していますが、こうした活動がラグビ―に興味を持つ人を増やし、大会を盛り上げる一助になったと自負しています。

ワールドカップを開催したからラグビー人気が続くわけではなく、これからの一つ一つの活動が大切です。親子ラグビ―教室をはじめ、これからも県と市と協力しながらラグビー普及に努めていきたいと思います。

〈プロフィール〉19歳で日本代表に選出されＷ杯２度出場。日本人で唯一世界選抜に三度選出。現在は一般社団法人日本スポーツ教育アカデミー理事長。７人制ラグビー専門チーム「サムライセブン」の代表兼監督も務める。

鈴木彩香氏

本大会を成功に導いた要因の一つは、運営スタッフの皆さんの熱意だったと思います。大会前からいろいろなイベントに出席しましたが、大会が近づくにつれて、一般の方々の期待が膨れ上がっていくのを感じて、運営スタッフの皆さんとともに絶対に成功させようと私自身の気持ちも盛り上がりました。

これまで女子ラグビーは好奇の目で見られがちでしたが、今は中学・高校の女子ラグビー選手を応援してくださる方も増えました。一流の試合を間近で見て良い刺激を受けた彼女たちは素晴らしい選手になると思います。

ラグビー人気の継続のためには、小さな頃からラグビーに親しめる環境作りや、ラグビーを楽しむイベントを定期的に開催するなど、ラグビーが年齢を超えて気軽に楽しめるスポーツとして定着することが必要です。試合を観戦して感動する、夢のような時間を過ごすことができたら、ラグビーは特別なものではなくなると思います。そのために女子ラグビー選手として私にできることはこれからも協力していきたいと思っています。

〈プロフィール〉神奈川県横浜市出身、関東学院在学中にアジア女子ラグビー大会の代表に選出。女子ラグビーの若きリーダー的存在

■神奈川県ラグビーフットボール協会会長

丹治 明氏

神奈川県のラグビー競技の普及は、神奈川県ラグビーフットボール協会が中心となり取り組んできた。

ラグビーワールカップ2019の開催を終えて、この大きな盛り上がりを一過性のものにしないために、これからラグビーをどのようにしていったらよいのか。神奈川県ラグビーフットボール協会会長丹治明氏に話を聞いた。

〈 日本代表の活躍 〉

ラグビーワールドカップ2019はこれまでのラグビーファンだけでなく、はじめてラグビーを見るという方々の間でも大いにも盛り上がり、大成功のうちに終了したことは、ラグビー界の今後にとって大きな喜びです。

強化練習のなかでスクラムを強くしてきた結果として、今大会ではほとんどボールをとられませんでした。強くなったのはスクラムだけではありません。現代ラグビーはボールを動かすスポーツになっています。今回の大会で再三素晴らしいワンハンド・パスをつなげた日本代表の世界レベルのプレーは、体格の勝る相手を見事に翻弄していました。

〈 ラグビーの見え方の変化 〉

競技場でも素晴らしいプレーを見た観客は自然に声が出ていたので、ラグビーの醍醐味が伝わったと感じています。ではこれでラグビーは人気スポーツになれるのでしょうか。

ラグビーは体と体がぶつかり合い、ケガをする可能性が高いスポーツだと思われてきました。しかし、今回のラグビーワールドカップのおかげで少しだけラグビーの見え方が変わってきているように思います。

体がぶつかりあう激しいスポーツですが、そのなかにフェアプレー精神やノーサイド、選手同士がお互いを信じあってプレーする独特の精神があります。その姿に、子どもたちだけでなく大人の方も感動されたし、なにより選手の顔が見えてきたことで、競技への関心が一層高まったと思います。

〈 これまでの取組と今後 〉

ラグビーワールドカップ2019の盛り上がりをきっかけに、日本の、そして神奈川県内のラグビーはもう一歩違う段階になっていけると期待しています。

これまでにもラグビーの裾野を広げるために、神奈川県ラグビーフットボール協会では『はじめてのラグビー・一斉体験会』を各所で開催してきました。小学校派遣授業やそのほかにも、様々な取組を行い、子どもたちにラグビーボールを追いかける魅力を伝えてきました。

また、県内にはラグビースクールがたくさんあり、小学校や中学校でラグビーを体験する機会が無いけれど、ラグビーが大好きというたくさんの子どもたちが通っています。安全に配慮しながらラグビーの楽しさを教えているスクールでは、様々な大会で試合を行い、技術を磨き合っています。

ラグビーの普及には競技者が増えるだけでなく、応援する人が増えることも必要です。今のジャパンラグビートップリーグにはトップクラスの外国人選手が加わっているので、国内の試合でも世界の一流選手のプレーを見ることができます。神奈川県内の競技場で行われる試合にぜひ足を運んでいただきたいと思っています。

体が小さくても足が速い、気持ちが強いといった、自分の特徴を見つけて表現するのがラグビーというスポーツの面白さです。

体格も得意なことも違う選手たちが、それぞれの特徴を理解し、リスペクトしながら、ゲームを組み立てていく姿をラグビーワールドカップ2019で見て、感動した人は多いと思います。

この感動を継続していくためにも、子どもたちがラグビーに触れる場所や機会を提供し、同時に素晴らしい試合が見られる機会を増やし、それを広く伝えていくことが重要だと思っています。

ラグビー
ワールドカップ
2019™

神奈川県・横浜市開催記録集

Rugby World Cup 2019™
Memories of the games held in
HOST CITY KANAGAWA · YOKOHAMA

発　　行　令和２年３月

発 行 者　横浜市市民局スポーツ統括室
ラグビーワールドカップ2019推進部ラグビーワールドカップ2019推進課
〒231-0017　横浜市中区港町１- １
TEL.045-671-4566　　FAX.045-664-0669
E-mail:sh-sports@city.yokohama.jp
ウェブサイト https://www.city.yokohama.lg.jp/kanko-bunka/sports/shinko/

神奈川県スポーツ局スポーツ課
〒231-8588　横浜市中区日本大通１
TEL.045-210-0797　FAX.045-662-5557
ウェブサイト http://www.pref.kanagawa.jp/docs/tz5/index.html

制作・印刷　株式会社 神奈川新聞社